こんな日常アリですか？

クー子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こんな日常アリですか？

【Ｎコード】
Ｎ６５４３Ｋ

【作者名】
クー子

【あらすじ】
主人公の上野　美紀は、お隣の武兄ぃにお見合いに連れてかれ、そこで出会った人たちに驚きを隠せなかったそのお見合い相手とは・・・。

プロローグ

私は、梅乃荘に一人で暮らしている女子高生。
お隣には、小さい頃から仲良しの武兄ぃが住んでいる。
武兄(たけにい)は営業の仕事をしている。
社会人なんだけど性格的には、とても営業なんて向いていないじゃないかと思うほど
おとなしい性格してます。
そんな武兄と私ですが、本当の兄妹のように仲良しです。
(と、私は思っています)
私の母は、一年前に亡くなり今は、母の保険金とバイトで生活をしていた。
またな必要最低限の暮らしながらも、頼りになる存在が身近にいて、学校にも通えて、
私にはとても満足できる幸せだった。
そんな時、隣人兼保護者な武兄がやってきて・・・。

1

武兄が、夕方私の部屋に来た。
まぁ今日は、バイトも無かったしちょうどひましてたんだけど・・・・。

「突然でごめんね。」
「ううん、どうしたの？」
「美紀ちゃん、明日って何か用事ある？」
「特にないよ。」
「じゃ明日一日、空けておいて貰っていいかな？」
「うん、いいよ。」
「ねぇ武兄、用事？」
「え・・・っと、お見合い」
「はい？」
なんだか若干、武兄ぃの顔に汗が出てきてる感じが・・・。
これが、冷汗ってやつか・・・。
「ねぇ、私まだ高校生だよ。」
「うん、知って「１６歳だよ」」
「ごめん！
今日いきなり、森田っていう先輩から、
見合いの話聞かされて、見合いの相手っていうのが、森田先輩の知り合いの息子らしくて、
いきなり明日、美紀ちゃんを連れてこいって言われて、断れきれなかった。」
「・・・・・。」
私は、武兄の事少しだけ情けなく思った。
　本来なら、もっと事前に伝えるはずだし、相手の写真や情報を会う前に持ってくるはずだ。
けれど、写真もなければ、名前、年齢、どこに住んでいるか、さえ

知らずにあうの？
断れなかったのかな？
　結局、明日になってみなければ、何も分からないんだよね。
武兄の先輩の知り合いだったら、変な人とかじゃないよね、きっと・・・。
（よしっ！）
「わかった。会うだけあって、断るね。」
「うん！とりあえず、会ってくれればそれで良いから。」

次の日、私と武兄は朝早めに家を出た。
場所は急だったので、静かな喫茶店で行われた。
私たちが到着すると、武史兄の先輩らしき人が先に到着していた。
「先輩、おはようございます、早いですね。」
「おはよう。」
「そっちの子が例の美紀ちゃん？」
「初めまして。上野　美紀です。」
私は、先輩と呼ばれた人に向かい挨拶をした。
「初めまして、こいつの先輩やってる森田です。
今日はよろしくね。」
森田さんは、そう言って挨拶してくれた。
うーん、この人だったら、武兄ぃまかせても大丈夫そうだと思った。
当の本人は、
「可愛いでしょ♪」
「見合い相手にまで、ノロケだすなよ・・・。」
「解ってますってV」
などと、へらへら笑ってたが・・・。

「美紀ちゃんの噂は、いつもコイツから耳にタコができるほど聞かされているんだよ。」
と森田さんはニッコリ笑った。

そして、武兄のほうを見るなり
「可愛い妹だな、くれ。」などと
冷やかし始めた。
そんな森田さんに対し武兄は、
「確かに美紀ちゃんは可愛いですよ。でもどうして先輩にあげなきゃいけないんですか？」
などと、反論。
そんな2人を笑いながら、世間話をして何分たったのか？
1人の男性が、こちらの席に歩いてきた。
「すいません。遅くなりました。」
声を聞いた私は、とても吃驚した。
だってその声は、毎日・毎朝聞いている声だから。
私が驚いていると、
向こう側の若い男性も驚いていた。
「なんで、上野ここにいるの？」
「先生こそなんで？？」

1（後書き）

やっとここまで書けました（ヨカッタ♪）。

2（前書き）

かなり、ダラダラ書いています。
読み苦しかったり、セリフばかりしてますが、
何ぶん初心者なものですから、気長にお付き合いいただけるとありがたいです。

2

今目の前には、いつも皆に囲まれていて女子からも男子からも大人気な私たちの担任がいた。
なぜか？私にはイマイチよく理解できなかったけど、森田さんの「見合い相手二枚目でよかったね～♪」
という言葉でやっと理解できた。
（・・・先生が見合い相手だったんだ。）
そして、同時に先生も理解できたみたいで、皆席に着くと一言。
「はぁ～、上野だったんだね。見合い相手って。」
先生は、ため息をつきながら言った。
「そうみたいですよ。先生こそ、なんでお見合い？先生ほどのカッコいい男（ヒト）だったら選び放題じゃないですか？」
「・・・アリガトウ。でも今は、特に好きな人や付き合ってる人も居ないよ、無理に結婚したいわけでも無いしね。」
「じゃ、今日は？」
「親父だよ。昨日聞かされて都合も聞かずにね。」
なるほど、同じパターンですか。
「とりあえず・・・「遅れてごめんね～」」
すごく、元気のいいちょっと先生に似ていて、先生をもう少しガタイ良くして渋くした感じのオジサン
が入ってきた。
そして、私を見るなり「美紀ちゃ～ん大きくなったね～」って抱きついてきた！！
「あっあの？？」
訳の分からず、取り合えず目の前にいた先生に助けて～って目線を追ってみると？
「親父！離話してあげなよ。上野困ってるだろ。」
うん、やっぱ先生頼りになる。

「ごめんごめん。美紀ちゃんに久しぶりに会えてうれしくて、ついね♪」
「えっと久しぶりっていうことは、オジサン前会ったことありますか？」
「あ～、もう小さい頃だし忘れてるかな？ずいぶん前にね。僕と君のお父さんは兄弟なんだよ。」
えっ、・・・初耳
てことは？
「そう、俺と上野はいとこ同士ちなみに弟もいるよ。」
うわ～～～～～「ねぇねぇ、武兄きいた？？きいた？？」
「あぁ、よかったなぁ」
「うん！！」
と喜び、すっかりお見合いのことから脱線してた私たち。
その後、お互い知っていたということもあり和気あいあいとおしゃべりをし、解散となった。

そして次の日
放課後、学校でクラスメイトの加藤君に呼び止められた。
普段あまり学校では目立たないようにしているんだけど、加藤君はクラスの人気者
とりわけ私とは接点が無くそんな加藤君が、一体何の用事なのか？

とりあえず、本人に確認してみることにした。
「加藤君何か用？」
すると、「あっと、今日家に連れてくるように兄貴に頼まれたから来て。」
と言って、私の机の上にある鞄を取るとそのまま昇降口へ歩いていった。
とりあえず、私も小走りになりながら、加藤君の後を追いかけた。

2（後書き）

文章つながっているのか不安ですが、とりあえずこのまま書き続けたいと思います（汗）。

3

加藤君の家は住宅街を少し進んだちょっと奥に入って突き当たったところにあった。
普通の一般的な家をほんのちょこっと、オシャレにしたような洋風な家で
玄関は、お花の寄せ植えが置いてあったり、犬の置物が置いてあったりとても可愛い。
そんな事を思ながら眺めていたら、「そーゆーの兄貴の趣味だから」って、
加藤君ちょっと恥ずかしそうだった。
そして、「兄貴は、７：００頃には帰ってくるからその間
ここで待ってて」って加藤君の部屋に案内された。

あの後、先生のお父さんっていう人が遅れてきて、なんとうちの父と兄弟だったことが発覚！つまり叔父さん？しかも、私も小さい頃会ったことあるらしい・・・。
こっちは全然覚えてないんですが・・・。
今回は、先生が私に用事があるみたいで弟の加藤君が家まで連れてきてくれた。

「うわ～～。」
思わず周りをきょろきょろしてしまった。
武兄の部屋とは、また違ったフインキだ。
「男の部屋って入ったことないの？」
「へ？あるよ。」
「へ～」
「暇だから、宿題でもする？」
「そうすっか・・・。」

こういう時だけは、宿題があってよかったぁ～て思うよ

「・・・・」
「・・・・」

「宿題、進んでる？」
「っていうか、終わった」
「私も。」
「ＴＶゲームするか？」
「うん。」
加藤君は、ナゼ？か懐かしのスー○ーファ○コンを出して、スー○ーマ○オ３のカセットをセットし
２コンを私に渡してくれた。
このゲームだったら、武兄のところでよく遊んでいた。
けれど、私はゲーム下手らしく未だに全クリ出来ない（泣）
そんな、思い出のゲームだ。
私が何気に思い出に浸っていると、

いつの間にか、私の番が回ってきた。
「よし！」「とりゃ！」「えい！」「やった～ｖ」
うん♪クリア～出来たｖ
そして・・・
「つぎ、加藤君だよ♪」
「おぉ、けど、ゲームやってる最中ってものすごく楽しそうだな。」
「そう？うるさくなかった？」
「まぁ、いんじゃね」

気がつけば２人ともゲームに夢中になっていた。
気がついたのは、私の携帯からで武兄専用の着信音（おもちゃの兵

隊の行進曲）だった。

～～～

『今日は、どうするの？もし帰るところ無かったら家でもいいからね。』
「最悪、大家さんに事情話して、また契約してもらうかな～（出来るかな～）」
「とりあえず、今日先生が話しあるみたいで呼ばれたの。その話を聞かない
限り帰れないと思う。」
『先生？』
『先生って、土曜日に会ったあの？』
「そう。あの先生」
『そう、先生に何かされたらすぐにいってね。』
「うん、わかってるって～（笑）」
「とりあえず、一旦切るね。」
『もうきるの～。』
「切るの。」
「じゃ、またね」
『またね』
武兄とかなり話してしまった。
それより、引っ越し！？どういうことだろう。
「ねぇ、加藤君、私のうちから荷物が無くなっているみたい何だけどって、
知らないよね（笑）」
「へぇ～全部？」
「うん、全部、しかも、アパートも解約済み。」
「洒落にならなねーじゃん。」
「うん。」
「どうしよう・・・。」
「うーん、最悪兄貴に相談してみたら？」
先生かぁ～、そこまで面倒かけたくないな～
とりあえず、先生の話を聞いて、今日は武兄の部屋にお世話になって

明日、大家さんに掛け合うかナ？
あとは、荷物・・・どこ行っちゃったんだろう・・・（泣）。
加藤君と思案しているうちに先生が帰ってきたみたいだ。

3（後書き）

だらだら文章です（申し訳ないです）（ー ー；
恋愛のれの字も出てきません。
気長に待ってください。
たぶんそのうち出てくると思います。

4

・・・週末の土曜日。
あれから武兄に連絡をいれたら、電話口で大泣きされ
土曜日一緒に遊びに行く！ということで、なんとか解放された。

先生は仕事、加藤君は家にいるらしく
とりあえずお昼は、レンジで温めてもらうことにした。
約束の時間は、１０：００
ちょっと、早めについてしまった。
周りは、公園らしく緑がいっぱいで親子づれやカップルで賑わっていた。
ベンチに座り時間をつぶそうとしていると、「美紀ちゃ～～～ん♪
お待たせ（笑）」
思いっきり笑顔で、武兄は走ってきた。
「そんなにあわてなくても良かったのに～」
「でも、待たせちゃ悪いしね♪」
「まってないよ♪」
今来たばっかりだし。
「じゃ、いこうか？」
「うん♪」
そう言って連れてきてもらった場所は、駅前の雑貨屋さん
見ているだけでも楽しくこのお店も私のお気に入り☆
武兄とも、こうやってたまに来たりすることがある。
私の癒しスポットだ。
私は、ノンビリ店内を見て回った。
途中、武兄とキッチングッズを見て、「これ、かわいいね♪」とか
アロマコーナーで「この匂いどう？」とか、楽しかった。
お昼は２人でラーメン屋さんに寄り、帰りに本屋さんによって先生

の家まで
送ってもらった。
最後に（武兄と1日1回メールをする）と約束させられた。

日曜日は、
先生の車で、買い物へ出かけた。
行先は、ディスカウントストアーだった。
「引っ越したばかりだし、必要なものがあれば遠慮なくいってね。」
と言うが、
今は特に無いし・・・。
ということで、「特に無いです。」と言っておいた。
必要になったら、自分で買いに行こう！
それから、3人で買い物をして帰った。
時々色々な事があったけど、
何事もなく、引っ越しも終え少しづつ今の生活に慣れてきた。

ある日、私はいつもの様に屋上に向かうため廊下を歩いていた。
前から思いっきりドンッと言う衝撃が左肩にぶつかりその場で前に
転んでしまった。
「ごめん！大丈夫だった？」
「あっ、平気です。」
そう言って顔をあげるとなぜか相手は無言・・・。
なぜか、顔が赤くなっていた。
「風邪ですか？」
「ちっちがっ、またね！」
そう言って、また走って行った。
第二犠牲者が出なければいいケド・・・
とりあえずメガネを拾い、屋上にむかった。

3人集まったところで、お弁当を広げる。

たわいもない話しをしている中
「ねぇ、部活入らない？」と菫が、言ってきた。
「なんでまた？」
「この間、ホームセンターの園芸コーナーで、勧誘されちゃった♪」
「誰に？」
「加藤君たち♪」
「なんで？」
「部活作るらしいよ？」
「「頑張ってねv。」」
「え～、一緒に入ろうよ～どうせ、この1年間の間に
部活動決めなきゃいけないんだし・・・」
「そうだけどさ～」
そう、うちの学校は1年間部活動を決める猶予がある。
その代わり、強制的に入らなくてはいけない。
「どんな部活？」
「ハーブ研究部♪」
「「何ソレ？？」」
「さぁ？」
「お願い、訳わからない部活進めないで・・・（汗）」
その言葉を最後に、お昼を終え午後の授業に向かった。

・・・夜、夕食を食べながら加藤君に聞いた。
「ねぇ、部活作るってホント？」
「あぁ、誰かから聞いたの？」
「菫に誘われた。」
「あっ、あの子ね。」
「ホームセンターで、ナンパしたって聞いたよ。」
「へぇ～（笑）」
先生がニヤニヤしてる・・・
「しっしてね～、ナンパじゃねーし、勧誘だ！」

「あっその件なんだけど、兄貴顧問ヨロシクねv」
「はっ、何いってんの？」
「いや～、兄貴のために、ハーブ研究部なんて設立するんだしv」
「いやいや、頼んでませんし。」
「お願い！！」
「部員は？」
「今のとこ2名、後輩ちゃんに2人勧誘頼んである。」
思い当たりすぎる・・・。
「5名か・・・まぁ少人数だしいいや、わかった。」
「と、言うことで、上野ぜひハーブ研究部入ってv」
「イヤイヤ、まだどんな部活なのかも判らずイキナリ入れと言われマシテモ・・・」
「あぁ、とりあえず、ハーブ育てたり、ハーブ使った料理したりお茶したり、
俺たちとしては、部活中まったりノンビリ出来ればそれでいいから♪」
「そういう部だったら喜んで（笑）」

と、いうことで次の日私たち3人もハーブ部入部決定！した

3日後
今日は部活初日だ！
顔合わせのはずが、集合場所がなぜか職員駐車場。
3人で待っていると、「お待たせ～♪」
あの声は、いつも加藤君と一緒にいる海野君だった。
「これで部員はそろったな」
「あとは、顧問だけか。」
「とりあえず、自己紹介しとく？」
そういって、順番に自己紹介を始めた。
「俺は、海野　信哉。コイツの親友ね。趣味は、女の子観察（笑）」

「海野は、あんまり気にするな。俺は加藤　春季。趣味ゲーム。」
「私は、小岩　菫。趣味ガーデニング。」
「私は、野原　草香。趣味読書」
「私は、上野　美紀。趣味雑貨？」
と、一人ひとり自己紹介が終わったとこで、先生が到着。
「ところで、今日は何でココに集合？」と草香が聞くと、「今日はハーブを買って植える。そして、育てていくからな！」とちょっと気合いの入った先生。
みんなで、ワゴンに乗り園芸店に向かった。
園芸店と言っても、馬鹿に出来なかった。
とても広く、ちゃんとハーブコーナもあってしかも種類が多い！！
はじめて来たけど、面白かった。
ハーブコーナーで、バジルとラベンダーローズマリーやその他2，3数種類と土やら鉢やらその他を6鉢づつ購入した。
そして先生の指示どうりに、いくつかのハーブの寄せ植えを作った。
水やりは先生がしてくれることになった。
・・・・・・数週間後
毎日の様に行われてる部活動。
ハーブの成長に合わせないといけないので、普段は先生持ち寄りのハーブティと
菫自慢のクッキー、時々私が作ったお菓子などでお茶したり雑談したりゲームしたり
で、和んでた。（部活動？？）
ちなみに今日は、調理実習室に集合だった。
ひさびさの部活動らしい活動
「加藤部長～今日はなにやるんですか？」
加藤君は、部員から部長にランクＵＰ！
そして、なぜか私が副部長・・・。
海野君か菫のほうが適任なのに～（泣）
加藤部長は「ハーブでナンカ作るらしい。」としか顧問から聞いて

ない。
ちょっと、駄目な部長だった。
ちなみに今日は、バジルソースを作ってパスタを茹でるらしい。↑
昨日買い物をちょこっと頼まれた時に得た情報だった。

5

調理と言っても、ミキサーにバジルペーストの材料を入れ混ぜるのと、
パスタを茹でて、それらを合わせるという単純作業。
私と先生は、分担し私はミキサー係、先生はパスタのほうを茹でる事になった。

レシピは、最初から配られていて、それを見ながらミキサーに材料を入れて・・・・
あっと言う間に終わり残り時間結構暇だった。
それは、先生も同じだったみたいで、先生はお鍋を見ながら本を読んでいた。
菫たちの方を見てみると、私たちと同じ分担方法をとっていて暇を持て余していた。

唯一賑やかなグループが
草香&加藤君グループだった。
どうやら、草香は料理が苦手らしい。
そういえば、加藤君も家では料理しないし・・・（汗）
そんなことを思いながら見ていると、お鍋から一本の束になったパスタが出てきた。
（手助け必要かな？）
（んじゃ、私は、草香の方を手助けするわ（笑））
（では、加藤君の方を・・・）
（（よし！））
そんな事を菫と目で会話し、
「先生、チョット草香たち指導してきますんで
後お願いしても良いですか？」

と先生に声掛けると、
「うん、よろしくね～♪」
と、チョット嬉しそうに言われた。
どうやら先生も気づいていて、けど指導が面倒くさいらしい。
私は、加藤君を助けに向かった。

「ココで、みんな固まってても邪魔だからバジルソース作ろう」
そう言って、レシピを渡した。
「これの通り、ミキサーに材料を入れてね。」
加藤君は、言われた通り材料を入れていきスイッチを押した。
そして完成～♪
「あと、何すんの？」
「パスタ茹であがるまで待ってるだけだよ。」
それを聞くと加藤君は、カバンから漫画を取り出し読み始めた。
本を読んでいる先生。
漫画を読んでいる加藤君。
なんとなく似ていて、やっぱ兄弟だな～なんて思った。

やっとのことで、草香チームも完成！
みんなそろって一か所に集まり試食タイム♪
先生の茹でたパスタは、微妙なゆで加減でおいしかった♪
そのあと、いつもの様に雑談が始まった。
今日の話題は、料理の出来ない男子について。つまり加藤君のことだ。
「やっぱ、今時は料理ぐらい普通にできないとね～」
と菫。
「う～ん私苦手だから、料理できる人の方がいいな。」
と草香。
めちゃくちゃ加藤君に不利な話題でした（笑）
ちなみに本人は、「男子厨房に入らずって言葉しらねーのか！」

とちょっと切れてました。
「「「美紀は」」」と一斉に聞かれ、
「どおデモいいです。」
と答えておいた。

近頃、部活に入ったため、バイトの入り時間を遅くしてもらい、
その分、曜日を増やしてもらった。（６：３０～）
こちらの都合で申し訳なかったが、「いいから、気にしないでね～♪」という店長の奥さんに甘えてしまった。
そして、今日もバイトの日。
バイト先へ
私の仕事は接客だった。
お店に着くと、さっそく仕事開始。
常連さんには、「今日は焼き上がりにあわせてきちゃった☆」ということおしゃべり好きのおばちゃんや、「今日もバイトかい？がんばってるね～」とほめてくれるおじいちゃん
他にも、くるたびに声をかけてくれるお客さんたちがいて、楽しかった。
夜暗くなってきたころ、私と同じ学校の制服を着た男の子が店の中に入ってきた。

その子はパンをいくつかトレーに乗せ、レジに来た。
「ココでバイトしてるの？名前なんて言うの？」
はい？
「えっと・・・」
「覚えて無いかな？廊下でぶつけちゃって。」
廊下？ぶつけた？・・・・。
・・・・・・・・あぁ、思い出した。
「あの後、第二被害出ませんでした？」
「えっ、何？第二被害って？」

「だから、私の二の舞になった人出してませんよね？って」
「あぁ、うん、だいじょうぶだよ。面白い事言うね（笑）」
「いや、あれだけスピード出せば心配にもなるでしょ？」
「そんなに出てた？」
「出てました。廊下走ったらイケないんですよ！」
「ゴメン今度から気をつけるよ。肩平気？」
「大丈夫です。」
「よかった。」
「もしよかったら、名前教えて。」
「上野　美紀です。」
「美紀ちゃんね」
「お会計よろしいですか？」
「あっ、仕事中にごめんね。」
「いえ」
お会計を済まし、廊下でぶつかった男の子は帰って行った。

バイトから帰り、夕食は加藤君とおじさんの3人だった。
お風呂にも入ったし、さて寝ようかな？と思った時宿題をやっていなかったを
思い出し、机に向かった。しかも、よりにもよって私の苦手の数学・・・。
・・・・教科書・ノートを開き早？時間・・・・。
やっと、終わった。今何時？かなりたった気がする。
とりあえず、水でも飲んでこよう。
そう思い部屋から、キッチンへ向かった。
夜中だから当たり前なんだけど、真っ暗・・・。
キッチンへ行くと、人の気配（汗）
「誰？」
声掛けても返事無し。
とりあえず明りをつけようとスイッチを探しスイッチをＯＮに！

そして居たのは、座り込んだ顔の真っ赤な先生。
「先生！先生！風邪ひきますよ！」
「う・・・う～～ん」
「水飲みますか？」
「う～～ん」
コップに水を入れ先生に渡すと、先生はそれを一気飲み。
「大丈夫ですか？」
そう言って先生からコップをうけ取り、また水を入れコップを渡すと先生は、それをまた飲んだ。
「先生、ほら部屋で休んだ方がいいですよ。」
そう言って立たせようと、先生の右腕を両手で引っ張った。
すると、逆に引き寄せられ抱きしめられてしまった。
焦った私は、「先生、先生、起きてくださ～～～い（泣）」
と、起してみたものの反応なし。
動いたり、体に力を入れてみたものの駄目だった。
男の人の力というのは、格好強いらしい・・・。
改めて思ったのと同時に、朝までこのままなの？っていう疑問？が浮かんできた。

6

朝、やっぱりいつもと違う姿勢で寝ていると早く目が覚めるもので上を見上げると、整ったちょっと幼い先生の寝顔。
じぃ～っと見ていると、次第に、もぞもぞと少しだけ動いた。
起きた！と思ったら動いただけだった。
「はぁ～」とため息をつき、先生の胸にコツンと頭を当てると規則正しい心音が聞こえた。
その音が心地よくて、私はもうひと眠りした。

・・・視線を感じ、目が覚めた。
それは、先生の視線だった。
「何してるの？」
やっと、おきてもらえた。
「ようやく、目覚めました？」
「昨日のこと覚えてます？」
「いや、覚えて無いケド・・・。なにかした？」
先生は、待ったく記憶なしみたいだった。そんなに飲んでたんですか・・・。
「いえ、それほどの事でも・・・。ただ、先生が強引だっただけで・・・。」
あっ、ちょっと青くなってる。
「ねぇ、ほんと何したの？まさか、お嫁にいけない様な事してないよね？」
うわ、お酒って怖い。お嫁にいけないようなことってどんなことですか（汗）
「先生、経験あるんですか？」
「いやとりあえず、未遂。」
「未遂って・・・。」

「あっ大丈夫、相手春季だったから。」
ある意味大丈夫じゃない。
「とりあえず、お酒控えた方がいいと思いますよ。」
「そうする。」
「そうしてください。」
「で、昨日は、何もなかったんだよね。」
「・・・この状態が何もないというんでしたら、そうでしょうね！」
なんか腹立つ。
「いい加減、放してください！！朝食の準備がありますから！！」
そういって、私はキッチンに向かい朝食の準備にかかった。
私は、機嫌の悪い理由考えてた。
きっと、先生に抱きしめられてたことを何も無かったといわれ、
怒ったんだと思う。
でも、先生は大人だからそんな事気にしないとか、私のこと妹の様に
思っているとか？・・・
そこまで考えて私はふと思った。
抱きしめられるという行為。
武兄とも普通にしてたけど、別に怒ることも無かった。
何で、先生の時は怒ったんだろう？

とりあえず、いつも通り学校の支度を終え学校へ。
学校では、いつも通りにしていれば平気かな？
そう思って過ごしていた。
先生も、そんなに気にしていないみたいだった。
まぁ、もともと酔っ払っていただけだったしね。
そして、いつも通り、部活の時間になった。
きょうは、おやつを作る時間がなかったから近くのコンビニで新作
のお菓子を
買ってきた。
今日は、私たちの教室に集まることになってた。

私たち3人（私・草香・加藤君）で待っていると、廊下から楽しそうな楽しそうな話声が聞こえてきた。
「来たみたいだね」
草香がそう言った時、ちょうど教室の扉が開き海野君と菫が入ってきた。
2人が入ってきた後からもう一人？
誰だろう？
「新しい人？」
加藤君が海野君の後ろの人に声をかけた。
「よっ！俺も入れて♪」
「・・・。」
「とりあえず、座れば？」

「じゃ、とりあえず自己紹介して」
「中野　静。海野と小岩同じクラス。よろしく」
そうして、新しく部員がまた一人増えた。

6（後書き）

いつも、ありがとうございます。
おかげさまで、総合?合計?ＰＶ１０００突破♪しました。
こんな文章でも、少しでも読んでくださる方いると思うと
とてもうれしいです♪

7（前書き）

文字数少ない割に長々となってしまったので、まとめてみました。
少しはまとまりました？
読んでくれている方には申し訳ありませんが、
所々、ほんの少しだけ変わってると思います。

7

部員が増えたところで、いつも通りそれぞれ持ち寄ったお菓子やお茶を
用意し、みんなで雑談し始めた。
今日の雑談内容は、歓迎会も兼ねて週末遊びに行こう！という企画だった。
そんな事をみんなで話していたら、いつの間にか先生が来てた。
場所は、遊園地に決まり、私と菫はお弁当係になった。
それを、先生に言うと判ったといって、お茶を啜っていた。

その話はそこで終わり、今度は、それぞれのノンビリタイムに突入。
この部の良いところは、～しなきゃいけないっていう縛りがないのが良い所。
私は、草香に勧められて借りてきた本を読む事にした。

本を広げさぁ読もう！と思ったら、何故か右斜めから視線を感じた。
ふと見てみると、先生と視線が合ってしまった。
恥ずかしくなってしまい思わず思いっきり目を反らしてしまった。
それからは、全然本に集中出来なくなってしまった。

その日の夜、いつもの様に武兄にいつもの様にメールで連絡。
そして、自分の部屋でゴロゴロしていると、ケータイにメールが・・・。
その内容は、
『まだ、起きてる？話たいことがあるから、
起きていたら部屋に行ってもいいかな？』という先生からのメールだった。
話と言うのは、多分今朝の事かな？なんて思いながら、

私はそのメールを見て、「まだ起きてます。良いですよ」と送った。
すると
ドアの向こう側からノック音が聞こえ「はい」
と言うと、先生が入ってきた。
どうやら、気を使ってお茶まで持って来てくれたみたいだった。
「先生、お茶まで・・・ありがとうございます。」
「いや、いいよ」
そういって、先生はお茶を入れ始めた。
「それで、お話ってなんですか？」
「あっあのさ、昨夜のことなんだけど・・・。」
「あっあれならもういいですよ。先生も酔っ払っていましたし」
「いや、でも・・・。」
「ほんと、大丈夫ですから」
「ほとんど、記憶無いんだけどキスとかしてないよね」
「キッ・・・キスなんてしてないです～（汗）」
「イキナリ、先生に抱きしめられただけですですから！」
う～～～自分で、発言していてものすごく恥ずかしい。
なんか今、顔真っ赤なんだろうな～
顔上げられないよ～
そう思いながら、ちらっと先生の顔を見てみると？
あれ？先生の顔もほんのり赤くなってる感じする。
「あの、せんせい？」
思い切って、顔をあげて声をかけてみた。
すると、「・・・・っえ・・・あっ・・・ごめん！ホント」
「えっ・・・だから、もういいですよ？」
「・・・・・」
「・・・・・」
「あっそうだ、これお詫びによかったらうけとってくれる？」
そう言ってくれたのは、ローズとラベンダーの香りがするリネンウォーター

植物が好きな先生らしくて、すごくうれしかった。
「ありがとうございます。」
私は、笑顔でそう言った。

8（前書き）

週末、歓迎会を兼ねて遊びに行くことになった遊園地。
ってことで遊園地のお話です。

8

週末みんなで遊園地へ

待ち合わせは遊園地の入り口
前日メールのやり取りで、私と菫がお弁当係になり
朝からキッチンでいそいそと作っていると、先生も早めに起きてくれて手伝ってくれた。
今日のお弁当は、唐揚げと卵焼き茹で野菜にサンドイッチにその他、と言った感じ。
ちなみに、菫のお弁当と同じ物が入っていないようにあらかじめ決めておいた。
私と加藤君は、先生の車で遊園地へ。
待ち合わせ場所に行くともうみんな集まっていた。
そして、なぜかうちの学校で音楽担当している海野　美登里先生がいた。
この先生の名前を聞けば誰でも想像出来ると思うけど、海野君のお姉さんだったりする。
しかもうちの学校では、「海野先生と加藤先生は付き合っている！？」という噂が年がら年中流れていた。
噂はどうでもいいケド、どうして海野先生がココにいるんだろ？
そう疑問に思っていると、
「海野、今日は何？」
海野先生と加藤先生は、大学時代の同期だそうだ。（草香情報より）
「弟から聞いて、一人で６人も面倒見るなんてたいへんかな～なんてお手伝いしにきたの♪」
「海野・・・お前余計なことを・・・。」
「イヤ、アノ、これは、その、すいません・・・。」
「とりあえず、入るぞ。」

先生がそういうと、みんなで先生と海野先生の後について行った。
そして、みんなでとりあえず乗り物について話していると、ほとんどが絶叫系の乗り物に乗りたい！という意見だったので、絶叫系の苦手な私は、荷物番をしている事にした。
すると、先生も「上野一人にしておけないから」と言って残ってくれた。
そしたら、「じゃ、私も☆」といって、海野先生まで残る事に・・・。
絶叫系は結構並ぶらしく、途中で草香が抜け出し「今2時間待ちだよ。」って
教えてくれた。
10分たった所で、大人2人と待っていた私はちょっと居ずらかったので、ジュース買ってきます。といってみんなのところへ行った。
みんなへ、「ジュース買いに行くけどいる？」と聞くと、「俺、コーラ」「同じく」
「私、紅茶」「私、ウーロン」「何でもいい」と、一通り聞いて、自動販売機を探しにうろうろし始めた。
すると、「上野！」と後ろから先生の声。
あれ？
「先生、待っていなくて平気ですか？」
すると、「上野一人にしておけないだろ。それにジュースも重いし。手伝うよ」
「ありがとうございます。所で、自動販売機ってどこにあるんでしょうか??」
「それ、確かめてから来たんじゃないの？」
「いいえ？ただなんとなくですが・・・」
「そう、じゃ、2人で探すか。」
「はい！」
そして、探し始めた自動販売機・・・目の前の販売所の直ぐ裏手にあった。

ちょっと、意気込んだ自分がちょこっと恥ずかしかった。
そして、買ったジュースを持ってみんなの所に戻ると順番が少し進んでいた。
私は、みんなにジュースを渡しベンチの戻り、座りながらジュースを飲んだ。
隣には、海野先生。
何故か、機嫌が悪い。
「あの、海野先生どうかしました？」そう声をかけたら、一瞬睨まれた感じがする・・・のは気のせい？
「上野さん、ジュースありがとう」
「あっ、いいえ」
いつもの海野先生だった。
それから、みんなが帰ってきて結局午前中は、結局あの絶叫系１つだけ。
そして、「「お昼にしよう！！」」という加藤君と草香の言葉で、昼食をとることになった。
お弁当は、もちろん私と菫の手作り弁当。
みんな、目を輝かせて見てくれてちょっと嬉しかった。
その中で、海野先生も弁当持参したというのでみんなでチョット注目をした。
これもまた、普通においしそうだった。
けれど、海野君や加藤君、それに先生まで何故か青白い顔をしていた。
「ねぇどうしたの？」思い切って加藤君に聞いてみた。
すると、「命がほしかったら、海野姉の弁当だけには手をつけない方がいい。」と、こっそり教えてくれた。
ちょっと、危なそうな感じだったので、菫にこっそりそのことを伝え、伝言ゲームの様に草香にもそのことがこっそり伝わった。
唯一伝わっていない中野君。
最初は、私の作った唐揚げを食べてくれて、次に海野先生のお弁当

に手をつけた。
見た目は普通の唐揚げ・・・。
中野君。
唐揚げ好きなんだね。
海野先生の唐揚げを食べた時、何故か中野君からゴキッていう音がしたのは、気のせいかな？
中野君は、顔を真っ赤にして涙目で走って行きました。
どんな味なのかはご想像にお任せします。
残された私たち、海野先生のお弁当には手をつけられませんでした。
被害者は一人で済みました。（中野君ゴメンナサイ）
そして、菫と私のお弁当は完売しました。
恐ろしいお弁当を作った海野先生も、私たちのお弁当をおいしそうに食べてくれました。
午後は、空中ブランコやら、コーヒーカップなど私にも乗れそうなものをみんなが選んでくれてみんなで楽しみました。
最後に、「観覧車に乗ろう！」と言い始めた草香。
私たちも異議なしって感じで賛成。
いつもの様に、グーパーで乗るチームを決めた。
すると、今回も加藤君と草香、海野君と菫、先生と私だった。
そして、なぜかとっても不機嫌な海野先生と中野君。
海野先生は、私に「ねぇ、学校での噂知ってるわよね。お願いだから変わってくれない？」と耳打ちしてきた。
少し考えていると先生が、「上野いくぞ」と腕を引っ張ってゴンドラに乗り込んだ。
「先生いいんですか？」
思い切って聞いてみた。
「何が？」
「海野先生。」
「あぁ、あれは、大学時代からあぁだから気にしないことにしているよ。」

「へぇ〜。」
ってことは、海野先生の片思いか。
そんな事を思いながら外の景色を眺めていた。

登場人物紹介（前書き）

遅くなりましたが、これでほとんど出したいと思った登場人物を出せたので
～登場人物紹介～書いてみました。

登場人物紹介

・上野　美紀（１６）
家事全般が得意。
小さい頃に、父親が死亡。母親も、最近亡くなり一人暮らし。

・加藤　冬季（２８）高校教師
美紀や春季の担任。
趣味はガーデニング。

・加藤　春季（１６）高校１年生
美紀と同級生でもあり、冬季の弟でもある。

・海野　信哉（１６）
海野弟。
春季の親友。

・野原　草香（１６）
美紀のクラスメイトでもあり親友。
趣味は、本を読むこと。

・小岩　菫（１６）
同じく美紀の親友ただしクラスは違い、海野と一緒。
料理上手。

・海野　美登里（２８）
音楽教師。海野姉。料理については、家族から禁止されている。

・中野　静（１６）
菫や海野と同じクラス。途中入部してきた。

・加藤　一季
冬季や春季の父親。美紀の叔父。
普段仕事が忙しく出張や夜中に帰ってきたりでめったに出てこない。

・鈴木　武史（２８）
通称（武兄）
最初程、出てきてませんが、毎日美紀とはメールしてます。
そして、菫や草香とも連絡を取り合って美紀の周りの状況を常に把握済み。

冬季ｓｉｄｅ１（前書き）

冬季の視点で書いてみました。
ちょっと?長いです。

冬季side1

まさかあんな所に上野が居るなんて思わなかった。

いつもの様に仕事を終えて、帰宅、。
職場の付き合いでもなければ、飲みに行くこともなくまっすぐ帰宅。
そして、洗濯物、夕食の支度。
それが、上野が来るまでの俺の日課だった。

金曜日の夜、見合いの話を聞かされ突然で、びっくりしたが、
決まったことだったし次の日ということもあって、行くことにした。
とりあえず、親父が休日出勤するというので、一足先に行くことにした。
結局、遅れたけど・・・。
会った時、本当に驚いた。
何で、高校生がお見合いするのかって。
しかも、最初見た時上野だと判らなかったし・・・。
女って怖いと初めて思った。
素顔初めて見たけど、上野って意外に可愛いんだな。
んで、となりに座ってるのは兄貴かな？
かなり親しいみたいだし。

親父が現れて、上野が俺たちの従妹と判明。
そして、となりの男は上野の隣人だった（なんで隣人が一緒に居るのか最初わからなかったが要するに
幼馴染みたいなものか）。
家に帰ると、親父が「美紀ちゃんを引き取る！」と宣言。
まぁいつものことだし、女の子の一人暮らしよりかは安全だと思ったから、あえて反対はしなかった。

弟の春季もめんどくさそうに「どうでもいい」とつぶやいてた。
学校行く前、春季に、「お前のクラスの上野　美紀って子
今日家につれて来てくれ」と頼んでおいた。

家に帰ると賑やかな笑い声が２Ｆから聞こえてきた。
普段学校ではとても大人しそうな子と思っておたけど、とても良く
笑う子だと
判った。
俺は、ほんと上野の表面しか見ていなかったんだと思うと、もっと
見てみたい・・・そんな事を思っていた。

上野は、バイトをしていた。
学校では、大人しそうな生徒だが、バイト先では、とても人気のあ
る店員だった。
俺は、少し早目に仕事が終わり、店の中をのぞいてみると、
楽しそうに常連と会話をしながら接客をしている上野がいた。
その様子が、とても微笑ましかった。
時間になると上野が店から出て来て一緒に帰った。

ある日、上野がバイトの日なのだか、職場の飲み会でどうしても行
けなくなってしまった。
職場には、同期の海野姉が居る。
いつも通り、うっとおしかったが、職場の付き合いもあり断れなか
った。
仕方なく、春季にメールを入れ上野を迎えに行ってむらうことに・・
・。
そして、飲み会に行くと体育系の木村先生や教頭に次々に酒を勧め
られ、
終わるころには、思いっきりアルコールが回っていた。

如何にか、自宅に着いたのはよかったが、ノドが乾いてしょうがなくキッチンへ。
足音が聞こえたが、何故か足に力が入らなくなってしまい、・・・・
夜中だというのに、声が聞こえた。
上野？
まだ起きてたのか？
ノドかわいたな・・・
「せんせい・・・てるの・・・のむ？」
あぁ、水。
そのみずを飲んでも、まだノドが乾いて仕方なかった。
「はい、お水」
そう聞こえ、目の前にだされた水を受け取ると、また一気に飲み干した。
やっと一息つけたが、上野が離れようとしたので、とっさに腕をつかみ
引いてしまった。
そして、・・・・。

・・・・気がついたら朝だった。
目が覚めると、チョットした違和感を覚えた。
頭痛がまずものすごくする。
ということは、昨日はきっと飲みすぎた。
そして、何だか温かい。
俺は、飲み屋からヌイグルミでも持ってきてしまったのか？
それとも、春季でも抱いて・・・抱いて！？
そういえば、昨日夜中上野の声が聞こえたような・・・
ヤバい！！
まさか！！
俺は、過去に酔って夜中に春季のベッドに入り、胸をまさぐりながら寝ていた

という、とんでもない失態を犯していた。
朝起きた時は、2人して悲鳴を上げ親父は、
「最後まで犯されなくて良かったな（笑）」などと春季に声をかけていたが、あれは、俺にとっても春季にとっても一生闇に葬りたい過去だ。
でも、春季は男だからよかったものの上野は女の子だ。
どうする。
いっそ、責任とるか？
とっ、とりあえず、昨日のことを聞いてからの方がいいか。
それにしてもやわらかくて、温かいな。
もう少しだけこのままでいたいな。
眠いし、上野も寝ているしもう少し寝るか。
・・・・・。

週末、部活の一環で遊園地に。
どう考えても、部活ではなく遊び。
まぁ、楽しければそれでいいけど。
朝、キッチンを覗くと忙しそうに上野がお弁当を作っていた。
家でキッチンに立つ人間は、俺一人だった。

弟が生まれ、両親が離婚。
それから、親父がなんとか面倒見てくれたが、俺が家事を出来るようになると
親父は俺にまかせて、仕事を安心して出来るようになったみたいだった。
だから俺意外、ほとんどキッチンに立つということはほとんどなかった。
俺がこの家のキッチンでほかの人間が何かしているのを、眺めると

いうのは、
チョット不思議な感じだった。
そんな感傷に浸っている間にも、上野はチョコチョコ子リスみたいに動きまわっていてちょっとおもしろかった。
俺は、上野に近づき手伝うことにした。

弁当が作り終わり、遊園地へ
約束の時間までにどうにか間に合った。
だが、何故かそこにいる人物をみて俺のテンションは少し下がった。
海野姉。
大学時代からなんとなくアプローチしてくる女の一人。
それが職場まで付いてくるんだから、うざったくて仕方がない。
今日は、どうしてここにいるんだまったく！「海野、今日は何？」
「弟から聞いて、一人で6人も面倒見るなんてたいへんかな～なんてお手伝いしにきたの♪」
「海野・・・お前余計なことを・・・。」
すると、弟から俺の事情を聴いているのか
「あの、その、すいません。・・・」
と誤ってくれる。
うん。弟の方はホントいい奴だ。いつまでも春季の親友で居てほしい。
問題は、姉だけだな。
とりあえず、ほっとくか。
「とりあえず、入るぞ。」
移動開始！
中に入り乗り物の相談をはじめた。
「絶叫系は、外せない！」と、誰かが言い始めて結局一番人気のある乗り物から乗ることになった。
ただ、上野は「私は苦手だから、荷物番してるね。」と言うので、俺も並ぶのもめんどくさそうだったから、「上野一人にしておけな

いから
俺も待ってる」
と言った。
上野は、「一人でも平気です」みたいな顔をしていたが、まぁ正直本当に並ぶのも面倒だったし、上野と2人だったら気兼ねしなくて良いだろう。と思った矢先、「加藤先生のられないんですか？」
「じゃ、私も☆」といって、海野姉まで待ってる事に・・・。
俺たち荷物番を残し、並びに行った奴ら。
途中、野原が「2時間待ちです」と教えに来てくれた。
あと2時間。
海野姉は、一人横で話してた。
俺は、適当に相槌を打ち、聞きながす。
上野は静かに待っていたが、明らかに居づらそうだった。
突然、「あの、飲み物買ってきます！」
そういって、並んでいる奴らの方向に走って行った。
はぁ～、出来れば俺もついて行きたい・・・。
・・・あ、「海野先生、俺チョット行ってきます」
そう言って、上野が走って行った方向へ向かった。

冬季ｓｉｄｅ１（後書き）

読んでくださっている方いつもありがとうございます。
冬季ｓｉｄｅ書いてはいましたが、投稿しようかどうか迷っていました。
迷っている間に、話進んで結局少し長めになってしまいました。
そして、次回に持ち越し？
次回もよろしくお願いします☆

11（前書き）

とりあえず、遊園地の続きからです。

11

ゴンドラが真上に差し掛かる頃、チラッと先生の方を盗み見てみると、
視線が合ってしまった。
2人だけという空間と言うだけに、チョット恥ずかしかった。
しかも、先生は美男子の部類に入るほど、とてもきれいな人で
そんな人と2人きりって、・・・。
真上にくると、先生がとんでもない事を言い出した。
「上野、付き合おうか？」
「・・・・・・・・？」
「えーと、どこいきますか？」
「いや、そうじゃなくて、交際しようかってことなんだけど・・・。」
「光彩？」
「いや、光彩じゃなくて、男女の付き合いの交際」
「マジですか？」
「マジです。」
「で、上野からのお返事貰って無いんだけど？」
ニコリって、やっぱ先生は笑った顔も綺麗だ。
「はい？」
「ってことはＯＫってことで！」
「イヤイヤ、今疑問形でしたケド？」
「でも、返事したし。」
「はぁ～、判りました。でも、何なんですか？突然。」
「う～ん、ほらお見合いあったでしょ？あれ。結局上野から返事貰ってないし。
俺も返事あげて無かったし、ちょうど良いから、試しに付き合って見て、

それから返事貰おうかと。」
「ちなみにコレは、俺の案。見合いの返事をどうのこうの煩かったのは、
親父。２人が付き合う事になったっていえば静かになるし、上野の事ももっと色々知ることもできると思うんだ。」
最後、チョット恥ずかしかったけど嬉しいデス。
そこまで話してると、下についてしまい降りることに。
そして、楽しかった遊園地の時間も終了。
帰りは疲れているだろうからと、先生の計らいでピザを取ることに。
そして、就寝前。
いつもの様に、武兄にメールを送りゴロゴロしていると、ノックが。
「どうぞ？」と声をかけると、先生が入ってきた。
「先生って何着ても似合うんですね～」
ホントに。赤ジャージが似合うってどんな人だよ！って思ってたけど、
こんな人だったんだ（笑）。
先生を眺めていると、クスッて笑って「そろそろ話してもいい？」って
声をかけられた。
「メルアド交換しとこうと思って来たんだけどね。」
「メルアドですね。」
「そう、ケー番はもう知ってるし、メールだったらいつでもＯＫだから。」
「判りました。」
そういって、メルアド交換した。
それから先生にチョットした疑問をぶつけてみた。
「あの～、一応教師と生徒じゃないですか？もしバレた時は平気ですか？」
「あぁ、でも一応お互い、見合いしているもの同士だし、従妹同士だし、

最悪婚約者になっちゃえば問題なし？」
えぇ～、っていうか、ファンクラブの人に殺されそう・・・。
あ、もうつきあっている時点でアウトか。
「先生！ぜ～～～～たい秘密！です！！」
じゃなきゃ、殺される（泣）
「そうだね♪」
先生、判ってなさそう・・・。
「あっ、草香と堇だけには、教えてもいいですか？」
「うん、俺も念のため海野と春季にだけは教えておくから。ナンカあったら相談するといいよ。
もちろん俺にしてくれるのが一番いいけどね♪」
「はい♪」
「じゃ、もう遅いからそろそろ行くね。お休み」
「おやすみなさい。」
そう言って、先生は軽く私の口にチュッってキスして部屋から出て行った。
それが、私のファーストキスだったのも知らずに。
私は、しばらくそこから動けずただ、何があったのか把握するのに３０分以上かかってしまった。

１２（前書き）

いつも文章がとんでもなく汚くてすいません（汗）。
それでもって、いきなり夏休み！！です。

12

当日、晴天。
集合場所は、学校。
森田さんの車で武兄は来た。
そして、少しあとから海野君はお姉さんの車に乗ってきた。
送られてきたのかと思っていたら、何故かお姉さんまで降りて来て、
先生に何か話していた。

・・・そして、出発することに。
私と加藤君は先生の車の後部座席に。
助手席には、何故か海野君のお姉さん。
海野君と菫と草香と武兄は、森田さんの車に乗った。
途中ＳＡに寄って休憩して、道のりは思ったより長くて、
着いたころは、夕方に近かった。
道具一式を管理人さんに借りて、川の近くにテントを張ることになった。
そのキャンプ場は、緑豊かなキャンプ場でとっても心地よかった。
私たちは、男女１つずつのテントで大きめのテントを借りた。
そして、チョット苦労して張り終わったテントの次に、
夕飯の準備。
菫と私は、半合をかりて、お米を研いで材料を切る。
男子たちは、テーブルやその他の設置。
先生も、こっちに手伝いに来てくれた。
「あんまり、人手があっても余るでしょ。」
といって、手伝ってくれた。
半合はもう火にかけて加藤君たちが見ていてくれていた。
後は、カレーを作るだけ。
森田さんは、ガスコンロを持ってきていた様で、私たちはガスコン

ロを
借りて、カレーをを作り始めた。
お米よりも、早く出来てしまったカレー。
仕方なく暇な時間、持ってきていたお菓子やジュースで雑談していた。
ちなみに、大人たちはジュースではなく、アルコールだったけど・・・。
カレーが出来てみんなで食べたカレー。
野外で食べたというのが新鮮だったのか、大勢で食べたのが良かったのかどちらもなのか判らないけどとてもおいしかった。
食べ終わり私と菫と草香は軽く後片付け。
お皿洗いとかは、明日。
そして、3人で、シャワールームへ行った。

帰ってくると、大人たちはまだビール片手に談笑中。
加藤君は、いつの間にか草香とひそひそ話そのままどっか行ってしまった。
とりあえず、私と菫は、テントの中でお話することに・・・。
すると、中野君が入ってきて3人でお話をした。

外から聞こえる虫の声。
田舎だから、車の音は聞こえない。

一人モノふけっていると、中野君は心配そうに「どうしたの？」と、声をかけてくれた。
私は、「何でもないよ」と笑って答えた。
そしてまた3人で、話を始めた。

ふと、先生のことを思い出した。

先生は、まだ外でビールを飲んでいるはず・・・・。
この前野アレは、酔った勢いだったんだよね。
でも、アルコール控えるって言っていたし・・・・。
少し心配になってきたな。
あっちには、海野先生もいるし。
・・・・・。
菫と中野君に「少し散歩してくる」と言って、外へ出た。
夜風が気持ち良かった。
川辺を歩いていると、先生が耳元で「上野。」と声を掛けてくれた。
「せんせい？」そういって上を見ると「しっ！」と言って口元に人差し指を当てた。
？
訳がわからなかった。

13（前書き）

書き直し前に読んだ方、たぶん前のページと違和感あったと思います。
（もっと早く気づけばよかった（泣））ごめんなさい。
口調が、変な感じになってしまったので、書き直しました。

13

先生の視線の先にいたのは、草香と加藤君？
え～～～！？って、ものすごく抱き合ってる？？
もしかして、そういうゴカンケイデスか。
オッ、先生も若干目が光っているように感じられます。
そして私の隣からは、（（へ～あの２人がね～））と、近所のおばさんのごとく、
中野君と菫がなにやら、ヒソヒソニマニマと談笑中。
先生の隣では、独身貴族たちが「「寂し～」」と嘆いてた。
何なんでしょう。高校生カップル１つ出来ただけでこの盛り上がり。
ちなみに、「海野先生は？」と先生にお聞きした所、酔ってテーブルで
爆睡中。
何故か「いなくて良かった」と思ったのは、私だけ？

一盛り上がりし、今度は反対側を散歩することに・・・。
先生も酔いを醒ますため付き合ってくれることになりました。
「今日は、お酒の量控えてくれましたね♪」
「あぁ、約束だしね。」
「約束しなかったら、もっと飲んでましたか？」
「・・・・。いや、やっぱり押さえていたかな。」
「何故ですか？」
「今日は、海野姉もいたしもし・・・ほら、もしね、記憶無くして、海野姉なんて襲ってしまったら・・・。地獄。」
最後の方は、聞こえましたがスルーしておきました。
先生。一体大学時代何があったんですか？？
「先生顔色少し悪いですが、大丈夫ですか？」
そういうと、先生は「こうしていれば大丈夫♪」といって

私を両手で引き寄せられ、先生の胸がどアップ。
ちょっと苦しかったので、息が出来るように顔を横にずらした。
それにしても、先生の体温温かい・・・。
鼓動も聞こえ、「温かい・・・。」と先生の声がとても短かに響いてきた。

すると、何故かヒューヒュー！と野次の声。
「ここでも、カップルか（泣）・・・。」と独身貴族たち。
独身貴族の片割れもとい武兄は、先生に向かって、「それ以上は駄目だぞ！」と釘をさし始めた。

私たちは、とりあえずテントの場所まで戻ることになった。
海野先生は、相変わらずよく寝ていた。
森田さんは、私たちのテントに海野先生を運び入れ、私たちも休むことにした。
3人で、森田さんや武兄、先生に「おやすみなさい」と言って、就寝した。

2日目。
私と菫は朝早めに起きた。
朝食にサンドイッチを作り、お湯を沸かしコーヒーを作る。
その匂いにつられて起きてきた、森田さんと先生。
基本的に、起こすまで起きない武兄。
どうせならと、起こしに行くと、捕まりました。
「ちょっと、寝ぼけないで武兄起きてよ！！」
それを、外で聞いていた先生。
慌ててテントの中に突入し「なにしてるの？」と
若干笑顔ひきつっている先生。
「先生（泣）武兄寝ぼけてるんです～。助けて～。」
助けてもらい「俺が起こすから、上野は外にいてね？」

と満面の笑み。
「判りました。」
といって、外で待っているとやっとのことで起きて、先生もちょっとお疲れ気味。
先生、朝からおつかれさまでした。
朝食を食べ終え、昨日の夜と今日の朝の分と一緒に後片付け。
そして、それが終わり今日は、近くの牧場へ行くことに。

牧場はとても広く、ふれあい広場や乳搾り体験、乗馬体験、おみあげコーナーなどがあった。
私たちは、ふれあい体験に行き、動物にふれ合っていると、海野先生は、とても嬉しそうにウサギと追いかけっこしていた。
「先生、海野先生動物大好きなんですね～」と言うと、「中身が子供・・・。」と、先生は、あきれ返っていた。
しかし、例外が一人！
武兄が、そんな海野先生を笑いながら見ていたのを私は見逃してはいません！！
そして、次に乳搾り体験へ。
ここでも、海野先生は目を輝かせてたけど、
今回ばかりは、なんとなく判る気がする。
実際、牛の乳なんて触るの初めてだし、ちょっとドキドキ。
草香や菫も同じ感じだった様です。
男子に至っては、ナンカ下ネタの様な事を言ってた様な・・・いえ、何でもありません。ご想像にお任せします。

お昼は、バーベキューコーナーでバーベキューをしました。
こんかい、大人組は「バーベキューにビールは付き物！なのにな～」と文句が出ていましたが、車なのでアルコール禁止。
みんな仲良くジュースで乾杯♪
お昼もおいしく頂ました。

そして、お土産コーナーへ。
3人でおそろいのストラップを買って、草香は、読書の必須アイテムしおり（ラベンダー）やその他を購入し
菫や私は、食べ物を中心に購入。
先生や、武兄たちも同僚たちにと、大量に買っているみたいだった。
大人って大変そう。

13（後書き）

カップル誕生しました。（加藤君×草香）
なんか、早くねーか？などと思いながらも、くっつけちゃいました。

１４（前書き）

いつも、ありがとうございます。今回もキャンプ場での事です。

14

少し早いけど、キャンプ場近くの売店で夜ごはんの買い物をし、帰った。
少し早いけど、夜ごはんの支度を始めた。
今日は、ダッチオーブンと言うのを借りて、パン作りに挑戦。
草香が図書室であらかじめレシピを調べておいてくれた。
そのパンに、乾燥ハーブを加えハーブパンを作る。
こんなことでもしないと部活っぽくならないし・・・。
乾燥ハーブは、あらかじめ先生が用意しておいてくれたもの。
バジルやローズマリーをつかった。
それから、ビーンズのスープとニジマスの塩焼きで完成。

さすがにダッチオーブンを使用する時は、ガスコンロというわけにはいかず
草香がパンの生地作りをしている時に男子＋海野先生で、火を起こしてもらった。
武兄は、「海野先生も生地作りしないんですか？」と不思議な顔をしながら質問してたが先生が慌てて、「死人出したくなかったらこいつに料理いや、キッチンに近づけさせないで！！」と耳打ちしていた。
近くで聞いていた海野君もコクコクと首を縦に振っていたそうだ。
（後から聞いた話だけど・・・。）
ちなみに、私と草香は、スープの下ごしらえに入っていた。
と言っても、材料切るだけだけど。
先生は武兄に注意した後、魚の処理に回り、海野先生は退屈なのか先生のそばにいたかったのか、魚をさばいている先生のそばに一人で近づいていった。
「さすが、すごいわね。加藤君。」

「あぶないぞ。刃物使ってる。」
「ねぇ、私みたいな料理おんちって加藤君みたいな人ぴったりじゃない？」
「じゃ、今度俺の友人でよければ紹介するよ。」
「・・・・。加藤君って相変らず、意地悪なのね。」
「ありがとう（笑）」
「諦めないから。」
「・・・・・。」
私たちが、流しで材料を切り終え運んでいたころ
先生と海野先生がそんなやり取りをしていた。

先生も、魚の下処理を終えると私を見つけ、「ちょっときて。」
と私の手をつかんで引っ張っていった。
その様子を海野先生が見ていたのを気が付かずに・・・。

木陰に隠れると、先生は私を抱きしめ「チョットごめんね。少しこのまま・・・。」
といって、抱きしめていた。
「上野ってやっぱ温かくてホッとするな。」
「先生、それ抱きしめるたびいってません？」
「ホントのことだしな。最初ぬいぐるみかと思ったよ。」
「うわ～、それひどくないですか（泣）」
「えっ、褒めたんだけど。上野といると落ち着くって。」
「なら、いいです。」
「で、今日はどうかしたんですか？」
「あぁ、久々に海野姉に攻撃くらってチョット疲れた。」
「大丈夫ですか？」
「大丈夫だよ。俺には上野っていう彼女がいるし。」
「／／／／」
「あの、あまり恥ずかしい事をサラって言わないでください。」

「私、免疫ありませんから。」
「おれ、そんな恥ずかしい事言ってるかな？　上野申し訳ないけど俺で慣れてくれる？」
「・・・・。無自覚ですか？」
「上野、そんな上目づかいで長々と挑発的に見つめられると、キスしたくなる。」
「！！　これは、睨んでたんです！」
「へぇ、かわいいな。そんな顔だったら2人の時はいつも睨んでても良いよ。」
「～～～～！！」
「じゃ、目つぶろうか。」
「へっ？」
そういって、ガッチリ頭を押さえられ、
「！！」
キスされた。

私は、目をつぶるどころか見開いてしまった。
先生とは、これが2回目のキス。
しかも1回目は、唇をかすっただけの私のファーストキス。
まだまだ、初心者な私。

今回はなかなか放してくれない。
せんせい、私・・・。
・・・パタン。

「・・・えの？上野？」
あれ？？ココってテントの中？
横には、先生。
「先生？」
「吃驚したよ。キスしてたらいきなり倒れるから。」

「ごめんなさい。急に息苦しくなって・・・・。」
「・・・・。えっ、それだけ？」
「・・・はい。」
「そっか。キスとかって初めて？」
「えっと、先生に付き合ってって言われた日すっご～～～く短くキスしてくれたじゃないですか？あれファーストキスです。」
「・・・・・・。」
「悪い。ナンカ・・・仕切りなおすか。」
「えっ？？」
「俺、ほとんど覚えてないし、今日も気絶させちゃったし。」
「上野、上向いて？」
「あの、今ですか？？」
「今、だよ？」
上を恐る恐る向くと、先生の整った顔があった。
先生は、メガネが邪魔だからといって外すと私を抱きよせて、
「あっキスしてる間は、鼻で息するんだよ？」と言って
顔を近づけて、私にキスした。

１４（後書き）

ファーストキスって現実は、何歳ぐらいが多いんでしょう？
ちなみにクー子は、小学生でした。

15（前書き）

やっと、書けた3日目。
まだ続くキャンプ日記??

15

草香が、「そろそろ夕飯が出来るけどたべられる？」と呼びに来てくれた。
私の顔は明らかに真っ赤だった。
「大丈夫そうだよ。」先生が代わりに答えてくれて、「じゃ、先に行っているね。」
と、草香は先に行ってしまった。
すると今度は、「上野さんの具合どうですか？」海野先生だった。
「大丈夫そうです。」
「そう。じゃ、チョット加藤先生お手伝いしていただきたいんですが・・・。」
「わかりました。」
そういって2人で、テントの外へ行ってしまった。
私も起きてテントの外に出てなにか手伝えないかと菫に聞くと、
「あんたは、ココで座ってなさい！」怒られた。
私は、あれ？と思って、草香に尋ねた。
「加藤先生と海野先生は？？」
「その2人ならビールの買い足しに行ったよ。」
「そっか。」
それで、お手伝い。
「それにしても、海野先生ってすごいよね～。」
「・・・なに？何か言った？」
「えっ、だってパンの種作ってた時聞こえたケド、「私諦めないから」って
その発言の後、ちゃっかりビール買いに2人きりになってるし。」
「でも、今更どうにもならないと思うけどな」
「そうそう。」
途中で、会話に入って来た加藤君と海野君と中野君。

「大学時から結構兄貴我慢してきたし。今は上野がいるしな」
「えっ・・・」
中野君ちょっと驚いてる。
「俺が、先生の立場でも姉貴だけはちょっと・・・。」
と、話していると当事者たちが帰ってきた。
一斉にみんな注目したものだから少しびっくりしてる。
武兄は、海野先生の荷物を代わりに持ち、森田さんはまだ車に残っていた荷物を取りに行った。

全員が揃い、夕飯の準備も整い時間もちょうどよかったので、
食事＆酒盛りが開催された。
今日も賑やかな食事だった。
食事中、中野君に「後でチョット話があるんだけどいいかな？」と聞かれ「うん。」と、答えた。
食事が終わり、大人組はまだまだ酒盛り中。
私と中野君は川辺の近くへ移動した。
中野君は、さっそく質問してきた。「加藤先生と付き合ってるの？」と。
本当は、あまり教えちゃいけないんだろうけど、部活内で知らないのは、中野君だけ。
同じ部員としては、教えておいた方がいいのかもしれない。
ケド、先生に一度相談したい・・・。
と、思っていると、「そうだよ。上野は俺の彼女だから。」と後ろから先生の声が聞こえた。
私と中野君は驚いていると、「何やってるの？夜、静かな場所で男の子と2人きりになっちゃだめだよ。」
「えっ？」
「まぁ、今回は武史くんが知らせてくれたから良かったものの・・・。武史君すごかったよ。あの慌てっぷり。」
「やばい。」

「中野君先に帰って？はやく！！」
「えっ？？」
「いいから！！」
「判った。」
私はそう促し、武兄にメールした。
今、先生と居る事。
そして草香と菫に念のため中野君に何かあるかも知れないから
そしたらかばってほしいと、お願いメールをした。
案の定、過保護な武兄は中野君を責めようとしたが、中野君は草香
と菫に守られ未遂に終わった。

3日目
帰り仕度を早めにし、帰りはハーブガーデンに寄った。
本来はこれが目的だった（はず）
ガーデンでは、何百種類ものハーブが植えられていて、
とても面白かった。
先生は本当に楽しんでいて、幾つものハーブ苗を購入していた。

15（後書き）

常に忘れそうになる中野君です。
ハーブガーデンは、テレビや本で見て一度は行ってみたいと思っている所です♪

16（前書き）

なかなか進みません。っていうか更新遅くてすいません。

16

無事に家に着き、楽しかった？キャンプもとい合宿？も無事におわった。

着いた途端、やはり疲れが出たのか、
かとうくんも、先生も、そして私も、それぞれソファでまったりのんびりし始めた。
すると、いつの間にか寝ていた。
夕方、キッチンから物音がして目が覚め、先生の姿を見つけた。
「私も手伝います。」
「もっと、休んでもいいんだよ？」
「先生も疲れてるだろうし、手伝いたいんです！」
「じゃぁ、おねがいね。」
そういって、野菜皮むきを指示された。
先生とこうやってキッチンに立ってる時は、
学校の話題や友達の話題など何気ない話題をおしゃべりしながら、
料理を作って、
楽しい時間だった。

そんな、楽しい時間も過ぎて、夕食の時間。
いつの間にか、叔父さんがかえってきてた。
「お帰り美紀ちゃん！楽しかった？」
「はい。たのしかったです。叔父さんもお帰りなさい。」
「やっぱ、良い子だよね。早くお嫁においで？」
最近の叔父さんの口癖。
どうやら、先生との交際が発覚すると会うたびに＜お嫁においで＞と口説かれるようになった。
いや、叔父さんのお嫁さんじゃないんですけどね？

先生のほうを見ると、何気に呆れ顔。
「親父の嫁じゃないんだから口説くなよ。」
加藤君からの助け船。
「あっ、その手があったか！」
「「「えっ！！」」」
「美紀ちゃん、叔父さんオジサンだけど結構外見良いし、けっこんしてくれる？（笑）」
「ゴメンナサイ」
「即答ですか。」
「はい。」
だって、外見だけじゃね～。オジサンだし、さいご（笑）ついてたし。
絶対アレ、ジョーダンでしょ？
あれ？先生？顔ひきつってる？？
「とりあえず、腹へったから晩飯しよう。」
という、加藤君の合図？で夕ご飯をたべて、叔父さんにお土産を渡し、
お風呂に入り、いつものように武兄とメールをしていると、先生が部屋に入ってきた。
「どうしたんですか？」とりあえず聞いてみた。
すると、「用がないと来ちゃいけない？」
うれしい言葉だった。
「親父のさっきのプロポーズちょっと嫉妬した。」
「へっ、でもあれ明らかに冗談ですよね？？」
「そうだろうね。でもそれでも妬ける。」
「先生？あっあの・・・」
「何？」
「ぎゅってしていいですか？」
思いっきり勇気のいる告白だった。
「あっ、うん。いいよ。」

でも、なかなか行動に移せないでいると、せんせいが耳元で「こうすればいいかな？」って囁き
私の体を抱きしめた。
私も、先生の体に抱きついた。
この前は、先生酔っ払ってたけど、今度はちゃんと先生意識ありますよね。
「先生って、酔っ払っているとなんにでも抱きつくんですか？」
「・・・・・いや。もっとた・・なんでもない」
「なんですか？」
「うん、酔っ払った時のことなんて忘れよう、ね？」
「あの～、先生？」
「えっ、事実話してくれますよね？？」
「でも・・・。」
「そんなに酔うとひどいんですか？私、酒乱な人とは・・・。」
「ちっ、ちがうよ。話すから、ね。」
「一度しかないんだけど、前にかなり酔って春季と一緒に寝ていたらしい。」
「寝、寝ていただけですよね。」
「あ～、うん。胸さわって寝ていただけ。」
「・・・・・加藤君かわいそう。」
「ソッチ！ですか。」
「あの、先生。私と付き合う条件言っていいですか？」
「いいよ。」
「禁酒！！」
「やっぱり。」
「だって、酒の勢いで何回も浮気だなんてシャレにならない（泣）」
「確かに・・・。解ったよ。」
「その代わり、美紀ちゃんの前では飲んでもいい？」
「良いですよ？でも加減してくださいね。」
「あと、２人のときはいい加減先生っていうのやめてくれると嬉し

んだけどな。」
「じゃ、加藤さん？加藤君？」
「それじゃ、ご近所さんや春季みたい。冬季でいいよ。」
「冬季さん？」
「うーん、まぁいいんじゃない？じゃ、おれも美紀って呼ぶよ？」
「はい♪」

16（後書き）

１７（前書き）

読んでくださっている方ありがとうございます。
おかげさまで、いつの間にか、お気に入りに登録してくださっている方が
増えていてとても嬉しかったです。
これからも、よろしくお願いします。

17

夏休みもあとわずか。
昨日の夜、草香から加藤君のケータイ連絡が入ったそうだ。
「「図書館でみんなで宿題しよう！」だとよ。」
朝7時に起こされ、「おはよう！」の挨拶よりも前にそう言われた。
「うん、わかった。」
私は、そのまま起きて朝食の準備。
冬季さんも、３０分後には起きてきた。
冬季さんは、今日はお仕事。
なので、たぶんいつもの部活メンバーだけなんだろうな。
ちょっと、寂しい気持ちになりながらも、加藤君と図書館へ。
図書館へ着くと早速教科書を開き宿題開始！
２時間後、あっという間に終わらせた、男子たち&草香。
菫と私は、ノロノロで先に終わらせた人に教えてもらいやっと終わりました。
１３時過ぎ、どこかでみんなでお昼を取ろうということになり、近くのファミレスへ。
注文をしたところで、キャンプ地でのことを思い出し聞いてみることに。
「そういえば、加藤君と草香って付き合ってるの？」
べしっ！！・・・隣から菫に思いっきり頭をたたかれました。
「そういうのは、本人が言うのを待つのが友達ってもんでしょ？」
「そうなの？」
「そうなの！」
「じゃ草香、加藤君聞かなかったことにして。」
「・・・・何を今さら・・・・。」
「まぁ、みんなもいるし丁度いいんじゃないね、春季君？」
「まぁ、いっか。つきあってるよ。」

おぉ、認めたよ。へぇ～
「で、兄貴に言うなよ。上野。」
「えっ？たぶんもう知ってるよ？？本人から聞いたわけじゃないけど・・・。」
「う・・そ・・。」
「ほんとvすっごく楽しそうな顔してた。がんばってねv」
「うわ～～～～！！」
加藤君当分の間、この話題で冬季さんにからかわれるな。
「あれ？草香ちゃんどうしたの？」
「美紀ちゃん、お願い春季君助けてあげて？」
「へ？？助けるって？何から？」
「先生から！」
「いや、冬季さんはからかってるだけだからね、心配することないよ。」
「そうなの？」
「そうだよ。」
「よかった～」
雑談を交わしながら、お昼を食べ終え駅前まで行きお気に入りの雑貨屋さんに寄った。
草香は、クマのキーホルダーを見ながら「これ可愛いよねv」と加藤君に同意を求めていて、
その姿は、いかにも高校生カップルって感じだった。

私が、目の前の上段の棚を見ると可愛い鉢植えがあった。
鉢植えを見ていると、中野君が黙って取ってくれた。
「ありがとう。」といって値段も手ごろだったので鉢植えを買うことにした。
２つセットの鉢植え。１つ１つリボンをつけてもらい、包んでもらった。

帰ると、冬季さんはもう帰っていたようで、「おかえり。」
という声が、聞こえた。
「ただいま、冬季さん。」
「これ、お土産です。」
そう言って、片割れの鉢植えを渡した。
「ありがとう。可愛いね、この鉢植え。」
「これ、もう一つあって、おそろいなんです。あの、勝手におそろいなんかにしてゴメンナサイ」
「なんで、謝るの？嬉しいよ、おそろい。」
「よかった・・・。」
「とりあえず、部屋に置いてきます。」

１７（後書き）

図書館で勉強会でした。
勉強会よりファミレスの雑談のほうが長かったような気がします・・・。

18

夏休みが終わり登校日。
いつもの様に、学校へ登校した。
いつもの様に、草香と始業式が始まるまでおしゃべり。
いつもの様に、加藤君はクラスメートに囲まれ談話中。
そんな中、「加藤君彼女できたってホント？」声の主は、噂好きの御幸だった。
私と草香は、部活内しか知らない事をなぜ知っているのか？疑問に思いながら、
何気に、聞き耳を立てていた。
「良く知ってるじゃん。でも、彼女にあまり迷惑掛けたくないから、ココだけの話にしといて。」
それを聞いて、草香を見るとニコニコと笑顔だった。
「ちなみに、如何してそれ判った？」
「だって、彼女と一緒に図書館に行ってたでしょ？」
「・・・確かに。」
「見かけたの。それで判ったの。」
「・・・へぇ～」
よくわかったな～。あの時、草香のほかにも菫や私がいたのに・・・。
それに、海野君も中野君もいたはず。
何でわかったんだろう??
「それにしても、加藤って変わった趣味してるよな～。あのメガネだろ？」
「そうそう、メガネ猿。」
「・・・？何の事いってるんだ？」
「えっだから、加藤の彼女の上野の事だろ？」
「・・・上野は彼氏いるぞ？」

「「えぇ～～～～」」
いや、皆してそんな驚かなくても。
「なぁ、上野。」
話ふらないで～・・・（泣）
「さ、さぁ？」
「そうだよね、上野さんにいる居るわけないよ（笑）そんな情報無いし。」
隠してるんです。まぁいいけどね。
「そんなことより、加藤君の本命って誰??」
「さぁね。」
「やっぱ、上野さん・・・」
「「ちがう！！」」
「いや、2人して否定しなくても。余計怪しいじゃん」
そんな、ケリのつかない話をしていると冬季さんが“バンッ”っと思いっきり
音をたてて入って来た。
シーンとなってＨＲが始まった。

今日は、初日ということで、始業式だけだった。
帰り、いつものメンバーで帰った。
草香は、今朝の事を少し気にかけているようだった。
そんな草香の様子を加藤君も気にかけていたみたいだった。
「今日、草香家に泊まり連れて来るから。」
「判ったけど、草香に変な事しないでね（笑）。」
半分冗談で言ったつもりが、睨まれた。
まぁ、私の部屋に寝れば平気かな？
「冬季さんには？」
「もうメールした。草香にも伝えた。上野がいればいつでもＯＫだって。」

「そっか。わかった。」
「じゃ、ヨロシク。」
そう言って、私は夕ご飯の買い物があるためスーパーへ寄った。
加藤君は、珍しく「掃除をする」といって先に帰った。

スーパーを出ると冬季さんが立っていた。
「重いでしょ？持つよ。」
そう言って、荷物を持ってくれた。
朝、乗っていた車はどうやら家に置いてきたようだった。
「噂、聞いたよ。大変だね♪」
「楽しんでます？でも、そのうち消えますよ。人の噂も７５日でしたっけ？」
「そうだね。」
「ところで、今日の夕飯はなに？」
「今日は、豚の生姜焼きです。」
「じゃ、キャベツの千切りをお手伝いしようかな？」
「お願いしますね？」

家に帰ると、一生懸命掃除機と格闘している加藤君の姿。
「手伝おうか？」
と声をかけると満面の笑みで、「後、ヨロシク。俺迎えに行ってくる。」と出ていってしまった。
さっそく、掃除機の続きをやることに。
冬季さんは、買った品物を冷蔵庫にしまってくれた。

私と冬季さんが、お茶を飲みながら一息ついていると「ただいまー」と言って
加藤君が草香を連れて帰って来た。

18（後書き）

登校日1日目でした。

１９（前書き）

１８で登場（新脇キャラ）紹介？
脇役なので、特に細かいことは、決めてません。名前が御幸というのと、
噂好きということです。
一応、美紀や草香のクラスメイトの一人です。

19

私と冬季さんが、キッチンでご飯の準備をしていると、草香が珍しそうに後ろから眺めていた。
「先生と美紀ホント仲良いんですね～♪」
「そうなんだよ。ったく家ん中でいっつもイチャイチャしちゃって。」
呆れたような顔をしながら話す加藤君。
「家の中って言ってもお互いの部屋の中だけだろ。」
「でも、うらやましいよね～。学校じゃ絶対に出来ないでしょ？」
「そうだよね～。」
「もし、誰かに見つかったりしたら・・・って考えると、恐ろしいよね～」
「なんか、私もう遅いような・・・」
「あっ美紀、本当は私が“本当の彼女です”って名乗り出てればよかったんだけど。」
「冬季さんにも言ったけど、噂なんてほんの少し我慢してれば、すぐ消えるよ。
ワザワザ、噂煽ること無いよ。」
「そっか～ありがとう♪」
「それにしても、美紀も先生も相変わらず料理上手だね～」
「「ありがとう」」
「私と春季君が結婚したらココに一緒に住まわせてね」
「春季、もう結婚まで考えてたんだ～」
ニコニコと加藤君に顔を向けると？
「・・・（汗）」
「あっ、もしもの話です！」草香から慌てて訂正が入りました。
ご飯が出来り、４人で会話を弾ませながら、食事をし、その後草香と２人でお風呂に入り、部屋に戻りいつもの様に武兄にメールを打

つ。
草香は、加藤君とお話がしたいらしく、加藤君の部屋へ。
「こんこん、入るよ（笑）」
「ドウゾ♪冬季さん、ノックは口ではなく手でお願いします。」
「そう？わかった。」
「所で、噂の方平気？我が弟ながらアレでもけっこうモテてるみたいなんだけど、噂のせいで、被害被ってない？もし何かされたら直ぐに言ってね？？」
「大丈夫ですよ。今のところ冷やかされているだけみたいだし。心配してくれてありがとうございます。」
「ホントに言ってよね。」
ちゅっ「／／／」不意打ちのキスでした。
「冬季さん？」
キスをされた後、思いっきり抱きしめられ「美紀は俺の彼女なんだ。」
「春季なんかと噂になんないでくれよ。」
「ごめんなさい。」
冬季さんの腕の中であやまりながらうなだれていると、冬季さんは、抱きながら私の頭を撫でてくれた。

２０（前書き）

毎回読んでくれてありがとうございます。
今回も結構間をおいての投稿でした。
自分って結構マイペースなんですよ（笑）なので、気長にお付き合いいただけるとありがたいです。

20

授業も始まり、ある日
いつもの様に廊下を草香と歩いていると、向かいから海野先生がやって来た。
「こんにちは上野さん、野原さん。」
「「こんにちは」」
廊下でこの人に声をかけられたのは初めてだった。
「上野さん、春季くんとお付き合いしてるんですってね？」
「は？？」
「っんも～、とぼけなくっても良いのよ？将来義理とはいえあなたの姉になるんだもの。もし、困った事があったら、何でも行って頂戴ね？じゃ。」
そういって、海野先生は去って行った。
いや～、まさに今困っています。
この状況、どうにかして！！
周りから聞こえる、「やっぱ、加藤君と付き合ってたんだね～」とか「先生ってもう海野先生にプロポーズ済み！？」とか色々広がってますが・・・。
「草香平気？・・・」
「ゴメンこんな時に何だけど、私美紀じゃなくて良かったって思っちゃた。
えへ（笑）」
「草香・・・ひどい（泣）・・・」
「あぁ～そんなことより、美紀の方こそ平気？」
「うん、平気。」
「何かあったら私か菫に絶対言うんだよ」
「うん」
そう言って私たちは、教室に向かった。

教室では、噂好きの御幸がもうすでにネタを仕入れて来ているようで、皆に
発表していた。
しかも、その内容が自分に関わっているものだから、加藤君も聞き耳を立てていた。
すると、やはり御幸の矛先が噂の当事者である加藤君に向けられ、色々質問攻めにあっていた。
加藤君も加藤君でうんざりした顔で、テキト―にあしらっていた。
私たちは、草香の持っていた本を読んでいるふりをして、矛先が向かないようになんとか忍んでいた。
今日一日で噂は、学校中に知れ渡り、どこへ行ってもヒソヒソとアチラコチラからヒソヒソと聞こえた。
お昼休み唯一屋上だけが憩いの場だった。

元凶である姉を持つ海野君から「すまん！！迷惑かけた！」と頭を下げられ
「大丈夫だから、顔を上げてね。」
というと「はぁ～、何かあったら遠慮なく言ってくれよな！」
というので、「んじゃ、この状況どうにかしてくれる？」と冗談で言って見たら
「むり！」と返された。

そのうち鎮まると思っていた噂が思わぬ事態？で広がってしまったけど、私の周りには心強い味方が結構たくさんいてくれて安心した。

２０（後書き）

噂広がっちゃいました。

21

その週はその噂で持ちきりだったが、月曜日学校へ行くと噂が別のものにすり変わっていた。
冬季さんに訳を話したら早速、別の噂を流してくれたらしい。
すっかり落ち着きを取り戻し、学校生活を楽しめる♪と思った矢先、呼び出しされた。私を呼び出したのは、加藤君のファンクラブの子たち5名ほど。本当はもっと多いらしいケド、とりあえずと言う事らしい・・・。
「どんなご用件デスか？」と、とりあえず聞いてみた。
すると、「上野さんと言うのは貴方ね？加藤君と最近や・け・に親しいらしいじゃない。」
5人の中の一人、ショートカットで身長が高めの先輩だ。
「あのね？やけに親しいからって、私たちあなたの事うっとうしいとかちょこっと可愛がってあげようとか
思っている訳じゃないのよ？」
あれ？常識人だったりするこの人ていうか思われても困るけど・・・。
「ただ、もしよかったら上野さんも加藤君のファンクラブに入らないかな～なんて♪」
「はい？？なんでですか？？」
「あれだけ親しかったら、上野さんがこちらに入ってくれれば私たちも加藤君と親しくなれるんじゃないかと・・・。」
「いや、私が入っても意味ないかと思います。ということでゴメンナサイ。」
ペコリと頭を下げると、5人一斉にすごく悲しそうと言うか残念そうな顔をされた。
そんなすご～く残念そうな顔されてもな～・・・。
「あの～、もういいですか？」

とりあえず、何だかこの場から立ち去りたくなり声をかけた。
「上野さん、今日は断られたケド諦めないわよ♪」
とりあえず、今のセリフはスルーしておき、「失礼します」と一言言って立ち去った。
とりあえず、苛めとかじゃなくて良かった（笑）と思いながら、さっきの出来事を部活中に皆に報告してみた。
すると、加藤君から「ぜってー入るな。てか入っても俺は関わらない！」
と断言。
先生と中野くんには、「入らないよね？」と心配された。
菫と草香と海野君は爆笑中。
そして、最後に「入ったら、先生の権限使ってその春季ファンクラブ？潰すからね♪」
と念押しされた。
さすがに、それはやりすぎだろうと思い「私、元々人づきあい苦手ですし加藤君は男としては興味ないですから入りませんよ？」
と言うと、先生は安心したようで笑顔になり、加藤君は「あっそ」
と一言。
相変わらず、草香たちは3人で笑いこけてて「もう、これ以上・・・わ・笑わせ・・ないで・・・」と涙目になりながらお腹を抱え笑っていた。
3人とも何がそんなにおかしいのか私には判らなかったけどとりあえず、3人はほおっておいた。

21（後書き）

噂、簡単に解決しちゃいました☆
もうちょっと大事にしても良かったカモ・・・。とちょこっと思ってたりもしてます。

22（前書き）

お待たせいたしました。
って待っている方も、もう待ち疲れていたりするかもしれませんが
（笑）

とりあえず、少しずつ又少しづつ進めていきたいと思いますので
よろしくお願いします。

22

加藤君のファンクラブ勧誘の子があれから毎日来るようになった。

ナゼか、お昼休み草香や菫と居るときでさえ勧誘してくるようになり、しかもその子達も結構いい子たちだったりするから菫も草香も仲良くなってしまった。

草香にいたっては、恋敵(ライバル)じゃないの？

う～ん、まっいいか！

そう考えながら、今日も皆で屋上でお弁当を食べながら仲良くおしゃべり♪

そうすると自然に出てくる、草香ノロケ話。

ノロケ話につきものなのが彼氏の名前だったりする。

そして、皆自然に気づいて「「草香！！」」止めた時には遅かったらしい。

「えーとどうゆう事か説明してくれる??」

うん。ファンクラブ会長さん笑顔引きつっています・・・。

とりあえず、「「「ごめんね。」」」

基本ファンクラブの子たちいい子だったし、だましたみたいになっちゃたから謝りました3人で。

そして、「実は、本当の彼女は草香なの。噂の独り歩きってやつ?」

「・・・。」

ファンクラブ3人無反応です。

「確かに加藤君とは、仲良くしてるよ。従兄弟だし・・・。」

「へっ??」

「あっ、この事あまり言わないでね。私目立ちたくないし。」

そう、私は基本ひっそりとしていたい。

だから、加藤君や先生とは今まで極力近づかなかった。
最近、先生と付き合いだしても、私の地味な性格は変わらない。

「・・・・わかったわ。」
「とりあえず、草香ちゃんがカノジョで美紀ちゃんが従妹なのね。
そうとわかれば、
2人とも、ぜひとも我がファンクラブへ！」

「「無理！！」」
私以外に捕獲対象が増えてしまった。
とりあえず、あの人たちと居ても害は無いし楽しいから良いかな？

23（前書き）

遅くなりましたが感想アリガトウございました。
結局1話は、そのままにし2話少し変更いたしました。
これで、話がつながったと思います。
教えてもらえて助かりました。
本当にありがとうございました。

23

私と草香は捕獲対象認定を受けても、変わらずファンクラブの子たちと仲良くしていた。
うん、この子たちだったら草香も安心だ。

ある日の部活中、その事を加藤君に報告。
すると少し安心したようだ。
そして、ファンクラブの子たちの誤解を解いた事も報告。
すると、ナンカ複雑そうな顔・・・。

加藤君曰く、
「今回は、話のわかる子たちだったから良かったけど、個人的に草香いじめられたら最悪ジャン」って事だそうだ。
すると、草香が「じゃぁ美紀だったら苛められても良いの？
先生の事だってあるのに余計に、負担になっちゃうでしょ？」

「「加藤君最悪だね」」と、草香と菫。

さらに追い打ちをかけるように、「春季、あとでお仕置きね♪（笑）」と、
先生。
そしてそんな先生に、
海野君と中野君がもうひと押し「「俺たちの分もヨロシク☆」」っていうか、
海野君と中野君は、面白がってるだけだよね多分・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6543k/

こんな日常アリですか？

2010年10月8日21時30分発行